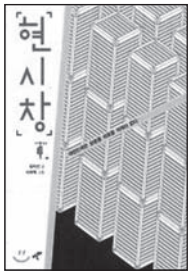
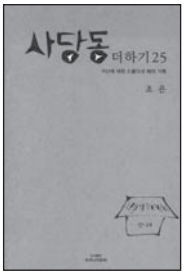
社会

福島みのり（早稲田大学非常勤講師）



イム・ジソン 著
『ヒョンシチャン　－大韓民国は青春を慰める資格はない』（アルマ、2012 年）
임지선『현시창 —대한민국은 청춘을 위로할 자격이 없다』알마 , 2012 년



チョウン 著
『舎堂洞（サダンドン）＋ 25　－貧困についての 25 年の記録』
（もう一つの文化、2012 年 5 月）
조은『사당동 더하기 25 가난에 대한 스물다섯 해의 기록』또하나의 문화 , 2012 년

資本主義が高度に発展した後期資本主義時代の現在、まるで初期資本主義、または資本主義以前の時代のように「貧困」という言葉が我々のまわりを徘徊している。モノが溢れているが豊かではない現実。私たちは毎日マスコミを通じて、失業率の上昇や生活保護受給者とホームレスの実態を目の当たりにし、各種統計や数値を通じて今が「貧困」の時代であることを確認する。特に、新自由主義経済政策の下、コスト削減による大量解雇と非正規職雇用の量産は、低所得者層と女性、そして若者の生を直接脅かしている。だが、彼らが日々経験している「貧困」は私たちにきちんと伝わっているのだろうか？統計と数値によって報道される「貧困」言説ゆえに、彼らの声は失われてしまっているのではないだろうか？

韓国はどの国よりも、深刻な格差社会になって久しい。それゆえか、数年前から日々体で「貧困」と闘っている人々の「声なき声」に耳を傾け、彼らの声を生き生きと描いた本が次々と出版されている。その中で、今年出た興味深い本を 2 冊紹介したい。一冊は、終わりなき競争社会の中で、自らの生を消耗させ「つらい青春」を生きる若者の物語『ヒョンシチャン』であり、もう一冊は 30 年前の高度経済成長期から現在の後期資本主義時代に至るまで都市再開発という名の下に施行された政策によって、社会の周辺部に追いやられた都市貧民の物語『舎堂洞＋ 25』である。前者はハンギョレ新聞の記者によるルポであり、後者は文化人類学者によるエスノグラフィーである。ジャーナルとエスノグラフィーというアプローチの手法は異なるものの、両者ともに失業率、所得格差などの数値では表せない社会的弱者の「具体的な生」について描いた本である。

● **イム・ジソン著『ヒョンシチャン　－大韓民国は青春を慰める資格はない』（アルマ、2012年）**
임지선『현시창 – 대한민국은 청춘을 위로할 자격이 없다』알마, 2012년

最近、韓国の若者言説には「つらい（아프다）」「しんどい（힘들다）」という言葉がよく見られる。「青春」とはもともと、悩みや葛藤を抱えつつも、それを乗り越えて大人になるという解釈において、「つらいから青春（아프니까 청춘）[1]」と捉えられてきたが、今の若者を取り巻く状況は、つらいから青春であるという言葉では慰めることができない、時代性と社会的条件が大きく影響を及ぼしている。「88万ウォン世代（20代の非正規職の平均月給を表す）」とも呼ばれる現在の韓国の若者は、「高学歴化」「就職難」と、それにともなう「経済的貧困」の中で、よりよい職を得ようと、同世代との終わりなき競争におかれている。「これまでもしんどかったのに、これからがもっとしんどい気がする」（『ヒョンシチャン』プロローグより）というある20代の大学生が語った言葉は、若者がおかれた「つらい現実」は、個人の努力で克服できるレベルを超えたものであることを物語っている。

『ヒョンシチャン　－大韓民国は青春を慰める資格はない』は、著者イム・ジソンが『ハンギョレ』社会部の記者をしながら現場で出会った同世代の青春に対するルポである。「ヒョンシチャン（현시창）」とは、「現実は下水のたまり（현실은 시궁창）」の略語であり、歌手エミネムが「夢は大きいが現実は下水のたまり」であると歌ったところに由来する。夢をかなえるには自分の目の前におかれた現実が、あまりにも取るに足らない時に自嘲的に使われるこの言葉は、今日の韓国の若者らが直面した社会的現実を赤裸々に表す言葉として、ネチズンの間で広まっていった（本書裏表紙より）。

本書は「つらい青春」の24のストーリーについて、「1．職場の裏切り」「2．競争の終わりはどこなのか？」「3．あなたも女性だったら」「4．そして事件は続く」の4つのパートから伝える。学費ローンを返済するために大型スーパーでアルバイトをしていた若者が、アルバイト先のガス室のガス漏れによって亡くなった「Eマートの地下で眠りに落ちる」、同じく学費を稼ごうと30分配達制度を掲げるピザ配達員のアルバイトをしている最中に交通事故で亡くなった「ピザ配達員の危険な疾走」など、貧困からなかなか抜け出せない若者の物語からは、「高額な大学授業料と低賃金アルバイトという実態」＝「大学・企業という巨大資本システムとそのシステムに搾取される若者」という社会構造の問題点が明らかとなる。4000ウォン程度（約300円）の時給に加え、一件あたり400ウォンずつ追加されるピザ配達の給与構造の中で、少しでもより多く稼ごうとスクーターの速度を出す若者の姿は、『搾取される若者たち』（安部真大、2006年）の中で語られている「不安定雇用の立場に甘んじながら、危険労働の現場に積極的に飛び組む」日本の若者のバイク便ライダーの姿に重なる。

問題は、経済的貧困のみではない。昨年以降、3カ月の間4人もの学生が自殺をした「KAIST学生の自殺ドミノ」では、韓国の中でも最も優秀な学生が集まる大学KAISTでの「成績相対評価による学費納入金差別制度」「100％英語講義」の実施など、「適者生存式無限競争」による過度なストレスによる問題点を浮き彫りにしている。名門高校出身であった若者が無差別殺人を起こした「江南Kids、無差別殺人」からは、名門高校ほど競争が激しい中で、学校・家庭において行き場を失っていった若者の苦悩が痛いほど伝わってくる。いわば、新自由主義政策下での競争社会は、若者の間に「自己啓発論」を強化させ、結果「バトルロワイヤルゲーム」へと追いやっていくのである。

著者イム・ジンソンは、この 24 のストーリーに見られる若者の現状から、「これでも世の中が彼らに『がんばれ！』という言葉をかけることができるのかと反問したくなる」という心情を明かす。「ヒョンシチャン（現実は下水のたまり）」のような現実よりももっと恐ろしいのは、未来もよくなるはずがないという絶望であり、若者をしきりにもがくようにさせる社会は「悪い社会」であるという認識から出発しなければならないと説く（p.7）。著者は、「ヒョンシチャン」を、同音異義語である「現視槍」、すなわち「現実（현실）を直視（직시）しろ、そして槍（창）をもて」と新たに解釈し、「今（현재）、歌を歌い（詩／시）、創意的に（創／창）今日の現実を勝ち抜いていこう（＝「現詩創／현시창」）」と提案する。

『ヒョンシチャン』の 24 のストーリーを読むと、先の『搾取される若者たち』とともに、若者の生きづらさを描いた雨宮処凛の『生きさせろ！難民化する若者たち』（2007 年）が思い浮かぶ。つまり、『ヒョンシチャン』は日本の若者の問題でもあるのだ。国境を超え、同時代を生きる若者の問題を自らの問題として考えることができる一冊である。

● **チョウン著『舎堂洞＋ 25　－貧困についての 25 年の記録』（もう一つの文化、2012 年 5 月）**

조은『사당동 더하기 25 가난에 대한 스물다섯 해의 기록』또하나의 문화 , 2012 년

ソウルの留学時代、新林洞（シンリムドン）にあるタルトンネ（달동네「月の街」と呼ばれる貧民街）を訪れたことがある。友人の祖母がそこに住んでおり、叔父が遊びにくるというので、一緒に遊びに行ったのだ。新林駅に降りてから、私たちは急激な坂を延々と上り続けた。すでに夕方だったからか、周囲はあまりよく見えなかったが、とにかく平坦な道がほとんどなく、歩くのに非常に不便だったこと、そして友人の祖母の家にはトイレがなく、数十メートル離れた共同トイレまで行った記憶がある。だが、タルトンネからの帰り道、山の頂上のようなところから見渡したソウルの夜景はとても美しかった。当時は、貧しい人々が住んでいる場所という認識はほとんどなく、「急激な坂」「共同トイレ」「美しい夜景」といった「体験としての記憶」のみが、今の私にイメージとしてよみがえってくる。

「時計すら買うお金がなかった私たちは、月を見て時間を知る。月を見て、仕事に出かけ、月を見て帰宅した。（「セッピョル（샛별）託児所」通信引用／『舎堂洞＋ 25』p.105）」という文章は、まさにタルトンネに住む人々の様子を端的に表している。だが、この通信によると「私たちよりももっと山の頂上に住んでいる人々は、月も見えないため、星を見て時間を知る。私たちは彼らを「ピョルトンネ（별동네／星の街）と呼んでいる」そうだ。タルトンネに住む彼らの認識の中では、もう一つのトンネであるピョルトンネが存在するのだ。『舎堂洞＋ 25』を手にしたときによみがえった私自身の過去の記憶。タルトンネ、ピョルトンネと呼ばれる地域に住む人々はその後どのような生を歩んできたのだろうか？

『舎堂洞＋ 25』は、1980 年代からタルトンネとして知られる舎堂洞に住んでいたクムスンハルモニ（クムスンおばあさん）との出会いをきっかけに、著者チョウンがその後 25 年にわたってハルモニの子供、孫世代の 3 世代にわたって彼らのライフストーリーへの追跡調査を行った記録である。チョウンが、彼らのライフストーリーを通じて明らかにしようとしたのは、「1980 年代から加速化した都市再開発の影響が彼らの生にどのような影響を及ぼしたか」である。すなわち、「土地の非資本主義的利用方式から資本主義的利用方式への転換（p.140）」によって撤去移住民となったハルモニ家族の生き様を通じて、「貧

困の連鎖」の実体とその原因を明らかにしようとする。

ここで、著者チョウンが試みようとするのは、巨視的な社会学的分析ではない。私たちは、「貧困」というものに対して、単に収入の程度、住居の狭さといった客観的条件のみで判断しがちである。だが、著者は「下から社会学する」学問の必要性から本プロジェクトを行っていることからも、そこに生きる人々が貧困をどのように受け止めているのか、彼らにとって貧困はどのように体験されているのかを描こうとする。いわば、こうした文化人類学的手法は、彼らの生活史を詳しくとることによって、特定の慣習や社会関係が個々人にどのように受け止められているかを知ることができるのである[2)]。

狭い部屋の中では、ゆったりと横になれず、斜めに体をねじらせてようやく寝場所を確保することができる話。学校からの帰り道、家の近くまできたものの家を探せない子どもの話（その間に再開発ゆえの撤去作業が行われたためである）。家政婦として働くことを隠しながら仕事に出かけて行く母親の話（他人の家で働くことは、ある意味、奴隷のような否定的なイメージとして捉えられるためである）。単発の仕事が多い建設現場で働く夫は、仕事がない日にギャンブルに明け暮れ、夫婦喧嘩が耐えない話。彼らの生を取り巻く語りには、常に「体一つで」という言葉が多く使用されること、などなど。いわば、「貧しさ」とは、統計の数値では表現できない皮膚感覚の問題でもあるのだ。

そして、著者チョウンはハルモニ家族のライフストーリーを通じて、貧困は「原因」ではなく「結果」であるいう結論にたどりつく。貧困文化の属性として捉えられている暴力、アルコール中毒、賭博、夫婦喧嘩、計画性のなさなどは、彼らを取り巻く状況によって必然的に生み出された「結果」であるという解釈である。事実、貧困を取り巻く状況は、IMF 経済危機による失業など韓国内の社会情勢のみでなく、よりグローバル化した金融資本が深く影響している。ハルモニの孫のヨンジュさんは、ベトナムの女性を嫁に迎え、現在ソウルに住んでいるが、こうした移住女性の存在は、生のあらゆる側面において低賃金を求めるボーダーレスの資本の移動によって生み出された現象の一つと捉えることができる。

本書の魅力は、貧困の再生産とグローバル資本のボーダーレス化を「個人の生」に照らし合わせて描いたという点のみでない。本書を読んで最も興味深く感じられた点は、「対象とどう向き合うか」に対する研究者チョウン自身の中立性をめぐる心の葛藤である。研究責任者として、現場の大学院生スタッフにプロジェクトが終わるまで「貧困運動」をしてはいけないと伝えたために、撤去再開発現場でのあらゆる暴力と不条理をただ「眺める」ことしかできない無力感に苛まれた話。その一方で、対象の家族が何事もなく（事故もなく）過ごすことを願う反面、何か事件がおきなければこの家族に対する関心が遠のき、事件が起きたときは「本当に興味深い事例だ」と考えてしまう瞬間（p.76）など、研究者としてのジレンマを率直に告白している部分は、フィールドワークを主たる研究方法としている研究者らにも共感できる部分が少なくないであろう。ほか、インタビュー調査をしながら、中産階級である研究者と対象者との間で使用する言語の差により、お互いに話の内容がうまく聞き取れなかった話、女性教授になじみのない地域の人々に常に「おばさん」と呼ばれていた話などは、そのエピソード自体がこれらの地域の有り様を物語っているといえる。

さらに、本書にはチョウンがハルモニの家族に出会ってから 22 年目に制作したドキュメンタリー映像の DVD『舎堂洞＋ 22』が収録されている。やはり映像の威力は圧倒的で、舎堂洞にあるタルトンネのイメージは、この DVD を見ただけでも訴えかけてくるものは十分に感じられる。だが、質的研究を

行う研究者にとって、対象に対するドキュメンタリー制作は、質的研究の金科玉条ともいえる「匿名性」を事実上破棄処分せざるをえない。さらに社会的弱者に対してカメラを突きつける「暴力性」は、その行為をめぐって常に批判の対象にさらされている。チョウンは、「映像で社会学すること」について、活字時代の質的研究の中に映像が導入されることで、映像的真実と文化記述誌的プロジェクトの間の相容れない研究方法や原則にどう対処すべきなのかが新たな課題となったことを指摘する（p.91）。

『舎堂洞＋ 25』は、「貧しい人々」からみた現代社会のあり方への省察とともに、研究対象とどう向き合うかといった視点において、研究を行う者たちに、再び自己の立場（ポジション）への省察を促すきかっけを提供してくれる。

1）「つらいから青春（아프니까 청춘）」という言葉は、ソウル大学教授のキム・ナンド氏が 2010 年に出版した本のタイトルでもあり、本書は韓国で 170 万部のミリオンセラーとなった。だが、本書は「青春とはつらくて当たり前だ」という視点から書かれており、時代性や社会的条件の欠如を指摘する声もある。

2）吉田禎吾「自伝の文化人類学的意義」（『サンチェスの子どもたち』みすず書房、1986 年、pp.298 － 299）参照。